

(第3種郵便物認可)

2016年(平成28年)4月1日(金曜日)

読 覧

# 国立和歌山病院に新病棟

## 10日移転 津波備え屋上避難所も

呼吸器内科・外科を一体化させた県内唯一の呼吸器センターや結核病棟がある国立病院機構和歌山病院の新病棟が美浜町和田の現在地の南側に完成し、10日に移転する。屋上は、南海トラフ巨大地震などの津波に備え、近隣住民ら約1600人を収容できる避難場所になる。



完成した国立病院機構和歌山病院の新病棟

鉄筋コンクリート5階建てで延べ床面積は約1万4190平方メートル。巨大地震で津波の浸水が予測される1階は壁を設けず、柱を中心とした高さ5・5メートルのピロ



結核病棟を見学する関係者ら(いずれも美浜町で)

ティ構造にした。2階は一般病棟と15床の結核病棟、3、4階が重症心身障害児者(重心)病棟などで、病床数は計310床。5階の一部には療育訓練室や備蓄倉庫を設ける。

津波などに備え、4階屋上(高さ28メートル、約3240平方メートル)を緊急時の避難場所として地域に開放。建物の4か所に非常階段を設置してヘリポートも整備し、総事業費は約38億円。

老朽化に伴う建て替えで、当初は3階建ての一般病棟と平屋の重心病棟を2012年秋に着工、15年1月完成の予定だった。しかし、11年の東日本大震災後、県が発表した南海トラフ巨大地震の被害想定では最大5メートルの津波が見込まれ、計画を抜本的に見直し、14年10月に着工した。

南方良章院長は「質の高い医療の提供と同時に、災害にも強い病院となることで、地域の皆さんに安心を届けたい」と話している。